

日蓮聖人と身延の環境

——四河を中心として——

上 田 本 昌

一、概 況

あらゆる生類にとって、水は生命の根源と密接にかかわり、不可欠のものと考えられてきている。即ち河川は古来、人間社会の成立・発展に重要な役目を果してきており、「命の水」といわれる位に、人類の発祥は大旨大河の流域から始ったといえる。

例えば中国の揚子江は全長五千キロ以上に及び、黄河の四千キロ以上に及ぶ大河と共に中国文化の発祥地を、その流域に抱えている。仏教の隆昌も又こうした地域と不可離の關係を保つてきている。又インドのヒンズー教を生み出したガンジス河、インダス文明を起したパキスタンのインダス河、エジプト文明の母胎となったナイル河、メソポタミア文明の源泉となったユーフラテス河等、数え上げるとこの他にも、人類と深くかかわつてきた河川だけでも、アジア地域のアムール。ヨーロッパのドニエブル、ドナウ。アフリカのナイル。カナダのマッケンジー。アメリカのミシシッピ、コロンビア。ブラジルのアマゾン等、いづれも大河というだけではなく、人間社会に大きな影響をもたらし続け、今なお深いかわりを持つているのである。

日蓮聖人と身延の環境（上田）

古代の人間社会は、主として大きな河川の流域に集落を構え、生産・交通の便を計り、境界線としても利用してきたようである。日本の河川も、海外の上記大河と比較すると、遙かに規模の小さなもので、足元にも及ばないが、それでも利根・石狩・信濃・北上・木曾・天竜・富士等の諸川は、わが国の主要河川として、日本人に古くからかわりあつてきている。

古代人は河川をもつて恵みをもたらす「母なる川」として親しむ反面、洪水・侵食等による恐怖の存在としてもとらえ、両面から河川に対する関心度は、大きく深いものであったことが理解できる。したがって河川の中に、これを統御する神の存在を認め、河神又は水神の信仰が生れていき、祭もおこなわれるようになっていった。現在、日本の各地に川を中心とした祭があるのは、その表れであるともいわれている。

二、四河について

ところで、日蓮聖人は文永十一年（一二七四）五月十七日身延山に到着され、翌六月十七日に、西谷の草庵へ入られたが、暫くして門下・檀越が訪ねて来たり、便りをもたらず度ごとに書信を発し、その中で身延山の位置・状況・自然の移り変わりについて、詳しく伝えていく。

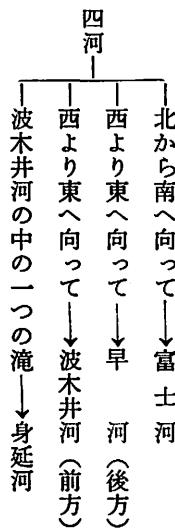
それによると、身延山は専ら四山四河に囲まれた中に在ることを述べているのであるが、四山については、既に一通りの観察を済ませているので、ここでは主として四河に中心を置いて、聖人の心境における一端を窺ってみることにしたい。

遺文中に四河を見ることができるのは、主として四山と対照し或いは並列的に扱っている場合が多いようである。

例えは

「此郷之内、戊亥の方に入て、二十余里の深山あり。北は身延山、南は鷹取山、西は七面山、東は天子岳也。板を四枚つい立たるが如し。此外を回て、四の河あり。從、北南へ富士河、自、西東へ早河、此は後也。前に西より東へ波木井河、中に一の滝あり。身延河と名けたり。中天竺之鷲峰山を此処に移せる歟。將、又漢土の天台山の来る歟と覺ゆ。此四山四河之中に、手の広さ程の平かなる処あり。」

と『秋元御書』に記している如く、四山を回って四河が流れていることを明らかにしている。即ち、



この四河の位置は、西谷の草庵から見た方角に当るわけで、この四山四河に囲まれた環境での生活であったことがわかる。この位置付けにより、当時の草庵がほどの辺にあつたかを知ることができよう。特に後方に早河を配し、前には波木井河の支流たる「一つの滝」を置いていることになる。この滝が身延河と名づけられているので、草庵はやはり身延河を前にした河添いに建立されていたと考えられてくる。前述の如く人の生活には、河川が必要であつて、水利の便の悪い処では、居住に適しないことになる。特に山中での生活には、天水のみを頼りにすると、当時全国を襲っていた天変地天の中でも早魃による被害は著しく、各地で雨乞の祈禱が催されていた事実からみて、生存があやぶまれてしまうことは事明であつた。したがってどうしても河の流れに添つた場所が選択されるに至

日蓮聖人と身延の環境（上田）

日蓮聖人と身延の環境（上田）

つたものといえよう。

そこで、前には身延河が流れ、後には鷹取山が聳える場所、即ち「身延の沢」に決められたと考えられる。身延河については又後で詳しくふれることになるが、総称としての四河については、『種種御振舞御書』の中にも、四山に続いて次のように記されている。

「四の山高きこと天に付き、さがしきこと飛鳥もとびがたし。中に四の河あり。所謂富士河・早川・大白河・身延河也。其中に一町ばかり間の候に庵室を結て候。」

爰では波木井河の代りに大白河をあげているが、これは波木井河の上流に大城・相又の二河があり、合流して波木井河という。即ち下流では三川一流で、身延河もこの河に合流し、ついには早河と同様最終的には富士河に皆合流して、駿河湾へ注いでいる。

三、富士川

さて、このように草庵の位置を示す上で、重要な役割を果してきている身延河を含め、聖人の晩年の生活と密接なる関係にある四河について、更に詳しく一河ごとに観察を加えてみることにしよう。

先ず初めに四河の中でも最大の規模を持つ富士河からみて行くことにしよう。この河は周知の如く甲府盆地の水を集めて、ほぼ山梨県の中央部を南に流れ、駿河湾に注いでいる。釜無川や笛吹川を上流に持ち、日本三大急流の一つにあげられているように、山間を急速な流れとなっている。特に四河の一つである早川と合流する地点は、屏風岩と

日蓮聖人と身延の環境（上田）

称する難所とされ、古來舟で上下する旅人にとっては、最も恐れられていた激流の箇所であった。全長一二九キロ、流域面積は約三、六五一平方キロに及んでいる。身延の地で大城川・身延川を持つ波木井川が合流し、水量を増して一気に南下し、南部の地で粟川を合せ、次第に蛇行を大きくして河口に向って行く。

日蓮聖人が入山された頃の富士河は、現在の河の状態とは異なる点も多いであろうが、全く違った所を流れているとも考えられないので、ほぼ七百年の流れは大きな差異があるとは考えられないであろう。平地を流れる河であれば、或いは洪水により、大きく流れを変えることも珍らしくはないが、兩岸が峻険たる山地で囲まれている場合は、流れも自ずと定まったものとならざるをえないであろう。

特に早川・波木井川が合流するあたりから川巾のさはあるにしても南部・富沢を経て、静岡県側に入り山間部をぬけ出すまでの蛇行しきりな地帯では、多少の異動はあったにしても、流れの大きな変動は、地形からいっても考えられそうもないのである。「一と雨ごとに瀬を変える」といわれる富士河は、主として盆地から山間部に至るまでの比較的河巾の広い範囲でいえることであって、山峡を流れる区間ではありえないことであろう。したがって、源流地帯から盆地を経て歟沢町近辺の山間部に至るまでと、河口から富沢町の山間部に至るまでの、比較的平坦な流れは別として、歟沢町から富沢町に至る間の山峡地帯では川巾も狭く流れも激しさを加え、人馬共に渡り難き場所として、旅する者はこの間の渡河は避けざるをえなかったものといえる。河巾の広く流れもゆるやかな場所を選んで渡河するのが常識であるから、敢て激流の難所を渡るとは考えられない。当時の旅人が、駿河国より甲斐国へ入る場合は恐らくはこの激流地帯たる山間の峽流をさけて、下流の渡河しやすい場所を選んだものと考えられる。

日蓮聖人がどの辺で富士河を渡り、甲斐の南部へ到着されたか、さだかではないが河の状況からいって、大宮を出

たあと天子岳の麓を通って、なるべく平坦な流れの広いおだやかな浅瀬を渡って北上して行ったものと推察するの
が、常識的であるといえる。ここで当時の富士河がどのような流れ方をしていたか、聖人の筆を借りて表してみると
「(A)此所をば身延の嶽と申。駿河の国は南にあたりたり。彼国の浮島がはらの海ぎはより、此甲斐国波木井の御身
延の嶺へは百余里に及ぶ。余の道千里よりもわづらはし。

(B)富士河と申日本第一のはやき河、北より南へ流たり。此河は東西は高山なり。谷深く、左右は大石にして高き
屏風を立竝べたるがごとくなり。河水は筒中に強兵が矢を射出したるがごとし。

(C)此の河の左右の岸をつたい、或は河を渡り、或時は河はやく石多ければ、舟破て微塵となる。かかる所をすぎ
ゆきて、身延の嶺と申大山あり。」

とある。(A)では身延の位置と大まかな距離を示し、(B)では身延入山の途次にある大河富士河について、その流れの激
しさを述べ、さらに(C)では、兩岸の様子と難所たることを表している。これは入山の翌年二月に新尼御前へ宛た御返
事の最初の部分であるが、文章表現上、多少の綾はあるにしても、身延入山の旅が、決して安易なものでなかったこ
とを如実に物語っているといえよう。ここでは主として(B)と(C)の文について更に検討してみよう。先ず、(B)では日本
第一の急流として知られている富士河が、北から南へ向って流れているというのである。河の位置・方角の設定がな
されている。次に兩岸は高山でさえぎられ、左右の岸は屏風を立てたようで、水速は筒の中へ強兵が矢を射込むよ
うであるというのであるから、その激流ぶりがわかるであろう。この状態では人馬共に渡河することなど不可能であ
るといえる。

こうした難所は勿論さけたとしても、比較的渡り易い所を選ぶことは、想像以上に困難であり、危険がつきまとい

ていたようである。(C)のように左右の岸を伝って、北上を続けたのであろうが、急流や岩石が多いため、難破して沈む舟も少なくなかったことがわかる。幸に聖人の一行はこうした難所を越えつつ大宮から南部への旅を無事に続け、身延到着を果したのであった。又妙法比丘尼へ与えられた御返事によると、四山四河にふれたあと、

「東には富士河、北より南へ流れたり。せんのはこ(鉾)をつくが如し。」

とも記している。流れの速さと勢いの鋭いことを表したものと見える。また弘安二年に新池殿へ送った御返事によると、遠江国より身延山までの道程について三百余里に及ぶことを述べ、その道中について、

「宿々のいぶせさ、嶺に昇れば日月をいただき、谷へ下れば穴へ入かど覚ゆ。河の水は矢を射るが如く早し。大石ながれて人馬むかひ難し。船あやうくして紙を水にひたせるが如し。男は山かつ、女は山母の如し。道は繩の如くほそく、木は草の如くしげし。かかる所へ尋入⁺せ給候事、何なる宿習なるらん。」

と語っている。この文中に河とあるのは、明らかに富士河のことであり、当時の富士河を溯る身延路が、如何に困難を極めたものであったかを知ることができよう。

聖人が入山に際し、こうした富士河とその兩岸の山々を、難渉しながら溯ったということは、その後、聖人を慕って登って来た弟子や檀越の人々も、同じ思いをしながら通行したことになる、駿河方面からの身延詣は、相当に不便なものであったことが推察されるのである。こうした悪条件の中を、しばしば西谷へ訪れた門下の人々は、強い信仰と聖人に対する帰依の念が、篤くなければできないことであったと考えられる。

ともかくも富士河が、身延入りの最大のネックとなっていたことは否めないであろう。ということは、逆に富士河が、他の三河と共に身延山の外濠としての役目を果し、安易に他からの侵入を防ぐための働きにもなっていたとい

うことができよう。聖人は身延入山の一つの因由として、大蒙古国の来襲に備え身延の深山に引き籠って時勢を待つといった考え方⁽⁸⁾もあるので、こうした嶮岨要害の地を選ばれたのでは、とも考えられる。早河・波木井河・大白河の身延を囲む水を集め、堂堂と駿河湾に注ぐ大河だけに、その存在は多様な意味を持って流れ続けて来たことになるであらう。

三、早 河

では次に、この富士河に注ぐもう一つの急流として知られる早河についてみることにしよう。この河は周知の通り、南アルプスの赤石山脈に源を発し、白鳳溪谷を伝って、上流は野呂川といわれ、奈良田・西山温泉を経て新倉川・雨畑川が合流し、早河となって身延町と中富町の境を東流し、身延町下山地内で富士河に注いでいる。富士河はこの早河が合流することにより、急流となって水嵩を増し、特に合流地点を屏風岩と称し、前述の如く富士河を利用して身延参詣をする者にとって、最も危険な難所とされていた。

富士河の支流の一つではあるが、白根・鳳凰といった重嶺疊峰の間から出て、野呂川の溪谷では沙金を産し、中世に一時的にもせよ注目された河川である。身延へ向って甲府盆地方面から来る者にとっては、必ずこの河を渡らなくてはならない位置にあり、聖人当時も武蔵国・信濃国等から身延山への道程では、さけられない河川であった。したがって遺文中にも、四山四河の一河として、しばしば記されている。即ち、

「從⁽⁹⁾北南へ富士河、自⁽⁹⁾西東へ早河、此は後也。」

「四の山は屏風の如し。北に大河あり。早河と名く。早き事箭をいるが如し。⁽¹⁰⁾」

とある如く、西谷からの位置がわかる。身延山の後側を西から東へ向って流れており、名の如くに急流で、箭をいるようであるというから、富士河の流れと同様に、水の速さも激しいものであったことがわかる。

これは実際に聖人が、この河を目前にして渡河された経験から出た文章だと考えられる。河の流れの方位、位置、流れの状況等、よく表現されている点、富士河の時と同様の筆致など、現実に見たり渡ったことがなくては表せない文章であらう。

惟うに聖人は、西谷の草庵建立中の一か月間を利用して、身延近辺の山里を遊行し教化された。現在その折りの靈跡が伝っているが、⁽¹¹⁾ こうした際に、早河を眺め、或いは渡河されたものと考えられる。『上野殿御返事』によると、「北は早河」⁽¹²⁾と述べ、草庵からは北に当り、身延山の後方を西から東へ向って流れていることになり、現在地とほぼ一致しているといえる。早河のことを「此は後也」と記している点は、特に実際に即して見た場合でない、わからないことであり、身延山を取り囲む四河については、すべて聖人が自らの足で確かめられたものといえよう。つまり身延山の後方を東流する早河を直接眼でたしかめられ、「自西東へ早河、此は後也」と記されるに至ったものと考えられる。「早き事箭をいるが如し」という臨場感も、自づとそこに湧いてくるものといえる。

このように観察してみると、西谷の草庵は北に身延山が聳え、その更に後方には早河が流れて、北方の守りをなす型となっていることがわかる。大河早河を配し、身延山を背負う位置は、法城を守る上からも極めて堅固な地型を選んだことにもなるであらう。鎌倉時代戦乱の絶間ない世上を反映し、更に当時全国民の不安と恐怖を巻き起した他國侵逼の国難を目前にして、堅固な地を定めることは、先見の明を持った聖人してみると、当然のことであつたらうと考えられてくるのである。⁽¹³⁾ 早河はかくて身延山にとり、北の守りを司どる一役を持っていたともいえよう。

四、波木井河

それでは次に、早河と並行する形で、身延山の前面を流れる波木井河について見てみよう。この河は現在、国道五十二号線を静岡方面から溯って来ると、身延町地内で相又川の流れと出会い、これに添って大城川が合流し、更に総門附近で身延川が合流し、波木井河となって、波木井地内で富士河に注いでいるのである。

従って、聖人が入山の際は、文永十一年五月十六日、南部に一泊されて、翌十七日に身延山の麓である逢島（現在総門が建立されているあたり）に到着されているので、南部から恐らくは相又河に添い、大城河を渡って、身延河と大城河の合流地点たる逢島に來られたものと考えられるのである。故に聖人は波木井河といたり、又は大白河（大城河）とも呼んでいる。現在の波木井河は総門より約二キロの地点で大城河・相又河が合流しており、全長は約四キロ程である。『種種御振舞御書』の「大白河」は、この大城河のことであるが、この河は水源を古谷城から更にさかのぼって、二千米近い高山や安部峠近辺から発しており、他の三河と同様にいくつもの沢を集めて、相又河と合流し波木井河となっているのである。

また、もう一つの相又河は大城口より南に添って断層谷をなし、小沢川を合流させながら、静岡県境の山々の水を集めて流れ、深い谿谷をなして、遺文に表現されている如く、地の底をのぞくが如き感を深くするものがある。

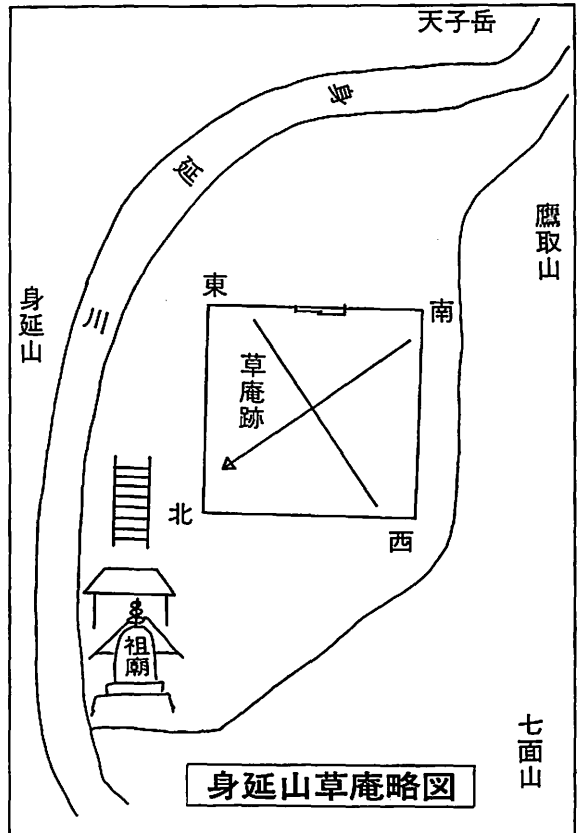
大城・相又二河共に上流は深山であり、急勾配で蛇行も激しく、浸食作用も甚しいもので、礫岩が累積していて、大雨・台風等による増水時は、崩壊作用が大きく、身延河や早河と同様に、「強兵が筒の中へ矢を注ぐが如き」激状を呈することになる。

波木井河というのは、地名をとったものと考えられるが、甲斐の国内にある中・小の河川は数多くあるが、その呼び方は必ずしも一定しておらず、地域によっては異った呼び名が付けられ、上・中・下流でそれ河の呼び名が違う場合が珍らしくない。先の早河にしても、上流では「野呂河」と称されているが如き、その一例といえよう。

「南に河あり、波木井河と名づく、大石を木ノ葉の如流す。」⁽¹⁴⁾

という一文は、激流波木井河の性格をよく表しているといえる。位置を示す祖書としては「南は波木井河」⁽¹⁵⁾ 或いは「前に西より東へ波木井河」⁽¹⁶⁾ と記されている。この一文は単に河の流れの位置を示しているのみでなく、草庵の向きを、同時に示しているといえよう。「前に西より東へ」ということは、草庵が南か又はそれに近い向きで建立されていたことを意味すると考えられる。「南に河あり」と記し、「前に」波木井河というのであるから、西谷の草庵の向

日蓮聖人と身延の環境（上田）



きが、これでほぼ知ることができる。

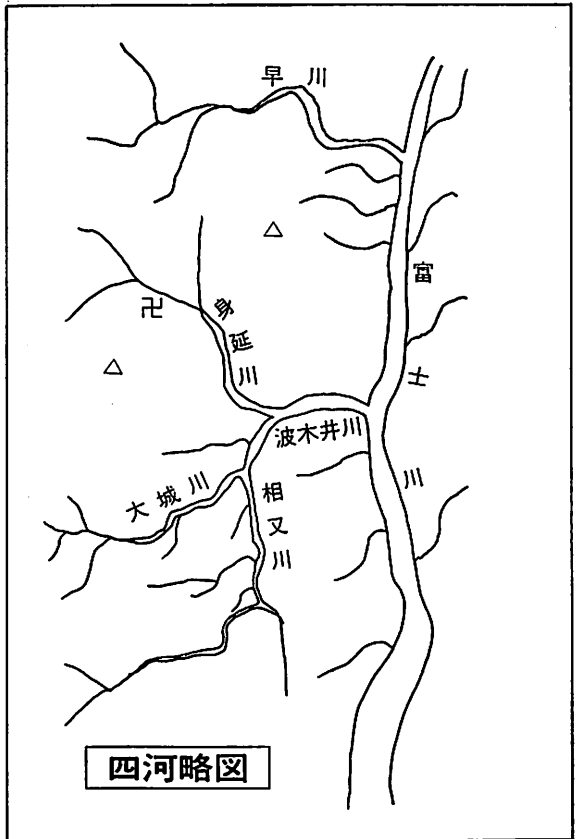
そこで、現在の西谷草庵跡に立つて見ると、石畳の敷き詰められ、石垣で囲まれた旧蹟は、鷹取山の裾が身延河にひたっている「掌程の広さ」の地に、南東向きの形で遺されている。聖人にとって東の方向は、忘れることのできない故郷の地に続くものであり、「生国へはいたらねども、さすがこひしくて、吹風、立くもまでも、東のかたと申せば、庵をいでて身にふれ、庭に立てみるなり。」⁽¹⁷⁾という心情から考え、東か又はそれに近い向きに建立されたとしても、不思議はないであろう。更に建築物の常識として、北を背に南へ向いて建てられることは、日当りや風向き等からいって当然のことともいえる。

従って、草庵は南東の向きであったろうと推察することができよう。因みに現在の身延山久遠寺祖師堂・大本堂・仏殿共に北を背にして南向きに建立されているし、法華経にふかい縁起を持つ中国の天台山国清寺も、大雄宝殿は、花頂・仏隴の峰々をうしろに、北を背にして南向きである。

こうして、波木井河は、大城・相又の二河へ、更に総門の附近で身延河を合流せしめ、波木井地内で富士河に注いでいるのであるが、草庵を囲むような形で、四山と共に身延の守りを自然の中に果しているともいえよう。山が峻険であり、河が激流を極めているということは、一面からすると、確かに交通不便で出入りに難渋するのであるが、又反面からすると、それだけに守りは堅固となり、簡単には進入できず、前述の如く外部からの攻撃に対し自然の砦に恵まれていたことにもなる。⁽¹⁸⁾

前記中国の天台山にしても、主峰の花頂を始めとして仏隴・桐柏・赤城の四峰は、いづれも峻険であり、石梁飛瀑を始めとする天水飛渡（桐坑溪）・銅壺滴漏・及び国清寺の前を流れる赭溪の四河があり、山外からの騎馬をさえぎ

五、身延河



さて、四河の最後、身延河であるが、これは前述の波木井河の一支流であって、さして大河という程ではないが、西谷の草庵に最も近く、聖人にとっては九年の間、日夜河音を聞き、その水流を眺められ、或いは生活上の用水とされたであろうという点で、特に意味のある河といえよう。

日蓮聖人と身延の環境（上田）

る役目を果し、仏道に精進する出家者の安全と、修行の妨げを防ぐことができたものと考えられよう。特に天台大師が籠山された花頂・仏龕の峰は、松林が多く智者塔院への径は急坂である。又修禪寺跡は山畑の中に在り、放生池も今は灌漑用の貯水池となっているが、この辺の山はほとんど樹木がなく切り立った岩山となっていて、要害堅固の感が深い。

日蓮聖人と身延の環境（上田）

先ず、身延河がどのような河であり、流れであったかを遺文に聞いてみることにしよう。

①「前に西より東へ波木井河中に一滝あり、身延河と名けたり。」

②「内に滝あり、身延滝と申ス、白布を天より引クが如し、此内に狭小の地あり、日蓮が庵室なり。」

③「谷には波の下る音鼓を打つがごとし。」

④「いぬい（戊亥）のすみよりかははながれて、たつみ（辰巳）のすみにむかう。かかるいみじきところ、峯には蟬のこへ、たにはさるのさけび、木はあしのごとし、くさはあめににたり。」

⑤の文は波木井河との関連を示しており、一つの滝として扱い、これを「身延河と名けたり」というのであるから、聖人の名命ともとれる。元来、身延山は聖人の入山以前は、全く知られざる山であり、旧名を「蓑夫」と称したものを「身延」と名づけられたと伝えられているのであるから、滝にも身延河という名命をされたとしても不思議はなからう。⑥の文も同様に滝として扱っている。「白布を天より引く」という表現は、現在の身延河ではあてはまらぬが、恐らく聖人の頃は、峻しい山の状態から見ても、充分首肯できよう。現に大正・昭和初期頃から比較しても、身延河の流れは台風や水害により、流水の緩急に変化を来たしていることが認められる。ましてや七百年の歳月を経ているので、滝の変化も当然といえようが、⑦の波音は激流に聞くことのできる水の響きが、谷にこだまする状態でもあらう。

⑧の⑨は、これ又重要な意味を持つもので、身延河の流れを示すと同時に、草庵の位置も、これによってつかめるものといえる。つまり「戊亥（北西）のすみより河流れて、辰巳（南東）のすみに向う。かかるいみじきところ」とは、西谷の草庵の場所が、こうした地点に建立されていたことを物語っていると見える。即ち、草庵の北西から北東

にかけ、更に東南へと身延河が流れ下って、草庵を取り巻く形をとり、南西は鷹取山が聳えて、城壁の代りをしてい
る。山と河をたくみにめぐらした自然の「法城」として、最もふさわしい地形であったとも考えられる。したがって
「かかるいみじきところ」ということになる。要害堅固ということは、同時に出入りは不便であって、このことは
表裏の関係にあるため、尋ねて来る人々にとつては、難儀なことであつたが、これは止むをえないことであつた。

この身延河は、①・②の文で明らかな如く滝として記されているが、天台山にも又滝があり、聖人が天台山のこと
を記される時、滝のことにふれている例が多い。⁽²⁴⁾同じ法華經の山として、中国と日本の相違はあつても、共に通づ
る点も又いくつがあるのである。

身延河は、現在西谷の檀信徒研修道場の辺で、樋沢河と合流し、門前町の裏手を東寄りに下り、総門で前記の波木
井河に注いでいる。又上流は妙石坊の附近で北沢が加わり、水量を増して、草庵跡へ向っている。

かくして、身延河は③の文より聖人の名命であること、滝の一つとしてみなされていたこと、④の文から草庵を取
り囲む形で流れていたこと等がわかる。同時にこれは聖人在山当時の草庵の周囲・環境を物語っているものとして、
貴重な点でもあるといえる。

六、小 結

以上、四河を中心として、身延山西谷の草庵の周囲を探りつつ、当時の状況を考察してきたのであるが、既に明ら
かな如く、四山と共に四河は、身延の草庵にとって、大事な役目を果たしてきていたことがわかる。

富士・大白・早川の三河は、さながら外濠の役目を持ち、身延河は内濠として考えられよう。特に身延河は西谷の

聖人にとって、最も身近かであり、生活上の要水を兼ねていたことも考えられる。交代に給仕した六老僧を始めとする門下が、毎日水を汲み、菜を洗い衣を濯ぎ、身を淨めるために、欠くことのできないものであったことも推察する。

時に聖人自ら、命名された身延の清流を汲み、法華經・釈迦仏に千歳給仕されたであろうことも、山水に囲まれた「いみじきところ」と称している文からも感じ得ることができよう。西谷の草庵を中心として見たとき、うしろには鷹取山が峨々として聳え、「梢に一乗の果を結び」前方には「湯湯たる流水湛て、実相真如の月浮び」庵の内では終日法華經誦誦の声、論談の灯が掲げられていたのであり、時には「霧立ち嵐はげしき折折も、山に入りて薪をこり、露深き草を分けて深谷に下て芹をつみ、山河の流もはやき巖瀬に菜をすゝぎ、袂しほれて干わぶる思ひ」をされたであろうことが推測されてこよう。

このように見てくると、身延の聖人にとって、四山四河は晩年の人生において、極めて重要な環境づくりに役立っていたことがわかる。特に前述の如く身延山・身延河は、聖人の日常に於て、不可欠の存在であり、生存そのものに深くかかわりを持っていたことがわかるであろう。四山四河が、単に自然の山河として受け入れられていったというだけではなく、聖人の思想・信仰の中に大きな影響をもたらし、身延山をもって「靈山淨土」としての受容にまで進み、更に「いづくにて死に候とも、墓をばみのぶのさわ（沢）にせさせ候べく候」という遺言状に示されている如く、滅後永遠に「身延の沢」を墓所と定められ、「永住の地」とされるに至っているのである。

四山四河に囲まれた身延は、釈迦仏・法華經を始め、十方の諸仏・守護の諸天が、めぐみを垂れ、天下りまします靈地であり、聖人の純粹に宗教的な「証の世界」でもあり、昼夜に感得されておられた「靈山」であったといえよう。

〔註〕

- (1) 『野村隴昌先生古稀記念論文集』の拙論「日蓮聖人の身延靈山考」—四山をめぐって—(三九五頁)を参照されたい。
- (2) 秋元御書 定遺 一七三九頁
- (3) 波木井殿御報 同 一九二四頁
- (4) 種種御振舞御書 同 九八六頁
- (5) 新尼御前御返事 同 八六四頁
- (6) 妙法比丘尼御返事 同 一五六三頁
- (7) 新池殿御消息 同 一六四四頁
- (8) 影山堯雄博士は『日蓮宗布教の研究』の中で、「身延疎開説」を「こう入道殿御返事」(九一四頁)から立てている。(三六頁)また茂田井教亨教授は『日蓮の行法観』の中で、身延疎開の理由を述べているが、その一つに蒙古が攻めてきた時の戦禍をよけるための「避難説」をあげている。(二七五頁)
- (9) 秋元御書 定遺 一七三九頁
- (10) 妙法比丘尼御返事 同 一五六三頁
- (11) 現在、身延山の近郷には、聖人によって教化され宗を改めた寺院も多く、往時を物語っている。町内「寺誌」参照。
- (12) 上野殿御返事 定遺 一五七二頁
- (13) 早河については、武田信玄の頃、「保の金山」と称される金鉱もあり、現在採掘の跡も残されている。
- (14) 妙法比丘尼御返事 定遺 一五六三頁
- (15) 上野殿御返事 同 一五七二頁
- (16) 秋元御書 同 一七三九頁
- (17) 光日房御書 同 一五五頁
- (18) 日本・中国を問わず、戦国時代の武将等が、築城に際し自然の山河を利用した例は、枚挙にいとまなき通例であった。
- (19) 秋元御書 定遺 一七三九頁
- (20) 妙法比丘尼御返事 同 一五六三頁
- (21) 同 同 一五六四頁

日蓮聖人と身延の環境(上田)

日蓮聖人と身延の環境（上田）

- (22) 芋一駄御書 同 一五五〇頁
- (23) 『身延山史』 一二頁
- (24) 大井莊司入道御書二一四三頁。松野殿女房御返事一六五一頁。秋元御書一七三八頁。尚、『大崎学報』の第一四三号、拙論「身延山と天台山」を参照されたい。
- (25) 「今年一百よ人の人を山中にやしなひて、十二時の法華経をよましめ談義して候ぞ。」（曾谷殿御返事一六六四頁）
- (26) 身延山御書 定遣 一九一五頁
- (27) 波木井殿御報 同 一九二四頁